軽種馬生産技術総合研修センター マンスリーレポート15

軽種馬生産技術総合研修センター
Center for Equine Breeding Technology

健康管理と獣医療技術
―分娩・新生仔馬の管理―

Foals have specific problems and should not be treated like little horses.
「仔馬は特別な問題を抱えていて，単に小さい馬として扱うべきではない。」
(新生仔馬には，ただ小さな馬というのでなく，別の分類の動物と考えたほうがよいくらい，いろいろな独特の問題がある。)

ケンタッキーで馬の診療をしているジェネヴィヴ・フォンテーヌ先生が，牧場関係者を対象に「米国における仔馬の管理の実際」(2007年７月31日 於 静内ウエリントンホテル)と題して実施した講演会の最後にまとめた言葉です。

「米国における仔馬の管理の実際」

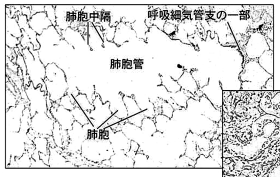
Dr. Genevieve L. Fontaine

生産地の牧場関係者にとっては，毎年のように春になると，仔馬の分娩には，細心の注意を必要とし，緊張が伴うものでしょう。

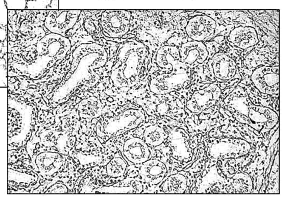
なぜ分娩時にはこんなに，緊張が必要なのでしょうか。実際に生命現象を勉強している獣医師にとっても，動物の分娩というのは，奇跡といってもいいほどの現象なのです。なにしろ，いままで水(羊水)のなかで生きていた生物が，一瞬にして別の世界に出て来てしまうのですから。

哺乳動物の肺は，胎児期には肝臓のような実質のある臓器ですが，分娩時には一瞬にして，スポンジのような組織の臓器になり，空気を蓄えられるようになるのです。また血液が酸素を得るために，胎児期では「臍の緒」の血管が重要な血流だった状態でしたが，外界に出ると，肺で酸素を獲得するために心臓と肺を結ぶ血流が重要な状態に変化するのです。心臓にあった孔(卵円孔)は塞がり，血流を必要としなくなった血管(動脈管，静脈管)は，閉じてしまいます。その変化を引き起こす為には，「臍の緒」の血流が自然になくなる事，大きく肺を膨らますことが重要なのです。

成人の肺



胎児の肺



このような難しい説明をお産の最中に獣医師から聞かされても，飼い主としては困ってしまうでしょう。でも安心してください。経験のある生産牧場の方々は，分娩のほとんどが何の問題もなく済んでしまうことをよく知っていることでしょう。

昔は仔馬が前肢，頭を出すと，夜中でも人手を集め，引っ張り出したものでした。さらには大慌てで，臍の緒が自然に切れるのを待つことなく，消毒した糸でその根元を丁寧に縛り，母体から切り離していました。それが何の意味もない，むしろタイミングをずらすと，自然な生命現象に反する事だったのです。

重要なことは，上記のような体の中での変化よりも，その結果として起こる，刻一刻と変化する仔馬の状態をよくチェックすることです。正常に生れた仔馬の変化を表にしました。

新生仔馬の健康チェック

- **心拍数：**
  - ―娩出直後　40～80回／分
  - ―起立を試みると　150以上回／分
  - ―数時間で，安静時　70～100回／分
- **呼吸数：**
  - ―30秒以内で呼吸の開始
  - ―初めは咳や息切れを伴う
  - ―娩出直後　70～100回／分
  - ―１時間以内で　50回／分
- **可視粘膜：**
  - ―明るいピンク色で潤っている
  - ―毛細血管再充填時間　２～３秒
- **体温**　37.2～38.9℃
- **吸引反射，嚥下反射**
- **腹這い姿勢**　数分以内で
- **自力起立**　１時間以内で
- **授乳開始**　２時間以内で
- **排尿**　６～10時間以内で
- **排便**　胎便　2,3時間以内で
  - 通常便　24時間以内(薄茶色)

まずは心肺機能のチェックから。呼吸はスムースに始まったか，ある程度経過したら，泣き声をあげ，肩を起こしたか。そして立ち上がったら，肢はまっすぐか，呼吸は落ち着くか，初乳はちゃんと飲んだか，排尿，排便はしたか。チェック項目はまだまだたくさんあります。「新生仔馬」が「小馬」になるには心配事や緊張感はいつまで続く事でしょう。

講師のフォンテーヌ先生は，仔馬の健康チェックの重要性を強調していました。また，どこかひとつでも異常があると，すぐ他の異常にもなることも加えていました。ただし，たとえ異常のあった「新生仔馬」でも，なんとかして「小馬」になれば，あとは馬として成長していくのを他の馬と同様に見守ればよく，いかにこの時期の対応が重要であるかも話していました。

異常に生まれてきた新生仔馬の看病